

## 秋山先生のこと

山 田 英 教

秋山先生について何かを語るのは難かしい。というのも、先生についての観察の至らなさをたちまち看破されて、「山田さん、それは違いますよ」と言われるのではないかというオブセッションをこちらが抱いているからであって、先生にはそのような意味で他人に安易につけ入る余地を与えぬところがおありになる。蓄積された学識と激動の時代を生きてこられた人生経験から生まれた物事に対する深い洞察力とが、先生の個性と重なると一種異様な迫力となって同学の後輩・若輩を圧倒するのである。

先生と私は本学では同期の桜で、共に51年に赴任して以来5年間研究室を共にさせていただいた。正直言って、最初は前記のような圧迫感を常に感じさせられ、時おり研究室を脱け出しては若い人たちの部屋に息をつきに行ったものであった。酒もタバコも無縁、お年を召されたクリスマスチャンで、謹厳を絵に描いたような大先生が相手では、浅学非才の若僧（にしてはいささか馬齢を重ねてはいたが）の私の逃避行も無理もなかった。しかも先生は寡黙であられた。いつ頃であったろうか。近づき難かった先生の口から意外にユーモアに富んだ言葉が流れ出ることがわかり、先生からお話を引き出せるようになったのは、机を間にしての対話から、少年時代を過された麻布界限・三連隊のラッパの音・二二六の頃・空襲で焼けた本のこと、戦後の立教大学教授時代の諸体験——学生紛争時代の徹夜団交から大庭助教授夫妻に至るまで、大庭さんの結婚の理由はシェイクスピアのそれと同じであるらしきこと——等々をうかがうことが出来たのであった。また、智者短軀、日頃はご持参のお弁当——私は秘かに「仙人弁当」と命名していた——を軽く摂られるだけの先生が時には200gのステーキを平らげる歯と胃袋の持主であられることも

わかってきた。

私が研究室から脱け出すことも少なくなった頃、学内の状況変化から先生も私も部長職に就かざるを得なくなった。先生ご在職の最後の二年間は執行部スタッフの一員として苦楽を共にしたのであった。学長以下若いスタッフの多い中で、今にして思えば肉体的にきついことも多々おありだった筈だが先生は誠心誠意部長職を全うされた。頭の下がることである。

今、私の手元に先生からいただいた一冊の本がある。私は不勉強にして先生の著書はこの一冊、「イギリス詩史」しか読んでいないが、この本に凝集された学識と文学的センス、言葉に対する意識は、先生の文学研究者として英文学に対する志向が奈辺にあるかを充分に証し出していよう。先生とこの著作にありうべき英文学者の一典型を見るのは私だけでは無いであろう。「イギリス詩史」にある Coleridge の詩から一節を引用して先生に対する惜別の賦に代えさせていたどころ。古希過ぎし先生の日々に幸多きを念じつつ。

The one red leaf, the last of its clan,  
That dances as often as dance it can,  
Hanging so light, and hanging so high,  
On the topmost twig that looks up at the sky.